㊍ 五條市役所（本庁）　☎22-4001（代）　㊐ 西吉野支所　☎33-0301（代）　㊎ 大塔支所　☎36-0311（代）

夏季企画展　天誅組の変145年・明治維新140年
「資料でたどる幕末維新−五條・吉野を巻き込んだ時代の渦−」

8月31日(日)まで開催中

■会　場　市立五條文化博物館３階特別展示室
（毎週月曜日は休館します）
■問合先　市立五條文化博物館　☎２４・２０１１

夏季博物館講座
天誅組の変145年／明治維新140年企画
「幕末維新史跡の歩き方−探訪話と鎮魂ライブ−」

■日時　８月２４日(日)　午後１時３０分〜４時００分
■講師　草村克彦先生(天誅組研究家)
■講演とコラボレーション
講演終了後、博物館円形広場で草村氏演出による鎮魂ライブがあります
演奏：綿鍋　伊久男氏(ミュージシャン)

新町と松倉豊後守重政
まつくらぶんごのかみしげまさ

五條代官所の設置（２）

代官所が機能するためには、陣屋内部の役人はもちろん、御用達・郷宿・御用飛脚などの組織や機関を必要とし、経済的な発展・交通上の利便性・文書の作成や伝達を含む文化的な一定の集積性などがあってこそそれが可能となります。今回は、それらを措いて、郷学（庶民を対象とした学校）として設立された主善館を取り上げます。

文化２（1805）年10月１日、２代目五條代官の池田仙九郎が、教諭所（学舎）を設立しましたが、それについて「今度、御代官様、御仁心に思い、教条所の普請が成就し、当月１日に始り、扨々、ありがたい事である」と当時の五條村の人々は喜んでいます。また9月26日には、「来月の10月１日、午前８時頃から陣屋で講釈を始めるので、百姓・町人で志のある者は自由に参加出来るので聴聞に来るように」との御用達からの廻状が村々に順達されています。この主善館についての断片的な記述を諸文書から拾ってまとめると右の一覧のようになります。荒井公廉（きみかど）と横谷葛南（かつなん）の教授２名の体制で開講され、男女を問わず一般庶民を対象として、風俗矯正を目的とした日常的儒教道徳が教諭されることになったのです。

五條代官所の管轄範囲が宇智郡・吉野郡・宇陀郡などの「深山窮谷」も含むため、教授が直接その場所に「時に巡って教を敷」くことも行うとしています。実際に、文化15（1818）年正月の代官所の初触によると、各組合村毎に希望すれば横谷葛南の次の教授の佐野周蔵が教諭のために廻村すると触れているし、また同じ年の初触で、西阿田村地域には荒井公廉が廻村するとしているので、２人の教授が地域別に分担をして巡村をしていることがわかります。横谷葛南については、狩谷掖斎（えきさい）・小林辰による『横谷葛南墓碑』があり、また森田節斎『粛翁・敬業二先生伝』の中に紹介されています。小林粛翁に句読を学び、後に「官遊数十年、志を得ず」帰郷し主善館の教授となったと言います。荒井公廉は、文化２年に池田代官に招聘され教授となりましたが、文化15年に江戸に出て林述斎（幕府の大学頭）の門下生となっています。17歳の時に阿波国から大坂に出て奥田松斎に学び、寛政７（1795）年、21歳にして大坂今橋坊で家塾を開きました。『古今名諺』・『孟子外書』など多数の著作があり、また三大農政家の一人である大蔵永常の著作『農家益』の跋文も書いています。

池田代官は、五條に赴任する前の大坂（鈴木町）代官所で、荒井公廉とこれが機縁で知己を得ます。つまり、地域の文化的リーダーである荒井公廉を中心として、江戸の林述斎・狩谷掖斎、大坂の大蔵永常、在村知識人である横井葛南・小林辰などとの知のネットワークが形成されるのです。天誅組の変の乾十郎や北厚治らは後の主善館教授森鉄之助の門人ですが、森鉄之助は八木の谷三山と親交が深く、森田節斎・吉田松蔭とも交流します。更に佐野煥教授の弟子には、新町の自由民権運動のリーダーで衆議院議員に当選する松本長平がいます。森田節斎は９歳から14歳まで主善館で学んでいます。こうして、主善館は、池田代官が当初企図した目的とは別に、地域社会の知識人を育み、江戸や大坂などの文化人との交流が深まり、皮肉にもその幕府を倒す人脈を形成することにあずかったのです。

名　称	主善館（郷校、学舎、縣学、学館、教諭所、学問所）
場　所	官舎（代官所）
対　象	村中の男女（村々百姓町人）、代官所の人々
時　期	毎月一日（文化2年10月1日午前8時から）
目　的	教諭（五倫の道、徳育、風俗矯正）
内　容	素読（書物貸与も可）、教科書『五條施教』
教　授	荒井公廉、横谷葛南：２名
その他	・寄宿も可 ・春秋に教授が各地を巡回する（組合村毎） ・聖像（孔子像）を学舎に安置

（新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員　藤井正英）